

# 米国大統領選挙の展望

## 理解の鍵は有権者の変革への渴望

異例づくめの米国大統領予備選。ブッシュ現大統領に失望し、新しいリーダーシップを求める米国人の期待が、今回の大統領選挙を決める最大の要素となっている。予備選の動向を展望しつつ、日本への影響も考える。

### 何もかも異例づくめの予備選挙

二〇〇八年大統領選挙は何もかもが異例尽くめの歴史に残る選挙となることだろう。民主党予備選は、バラク・オバマという史上初の黒人大統領か、ヒラリー・クリントンという史上初の女性大統領という劇的な選択肢である。しかも下手をすれば、八月末の党大会まで決着がつかないのではという危惧があるほどの大激戦だった。

激戦の民主党ばかりに関心が集まっているが、共和党のほうも異色の予備選である。二〇州以上で予備選が行われた二月四日のスーパーチューズデーで、ジョン・マケイン上院議員がほぼ指名を固めた。彼を含め異色候補同士の戦いだった。共和党にはそもそも、本命となるような保守本流候補がいなかった。マケイン候補は保守派に嫌われる一匹狼の中道派。ハツカビー候補は全国的な支持を得るにはあまりにも宗教保守に偏りすぎる。ルディー・ジュリアーニ前ニューヨーク市長は、二回の離婚歴やリベラルな社会観が共和党の保守派には結局は受け入れられなかった。ミット・ロムニー前マサチューセッツ州知事は政策軸を保守に移したとはいえ、自らのモルモン教徒というキリスト教では傍流の

信仰が宗教保守派との壁を作った。共和党の伝統的な基準からいえば、上記のどれもが異色候補である。なぜ、このような異例づくめの選挙になったのか。それは現職のジョージ・W・ブッシュ政権の負の遺産に尽きる。ブッシュ大統領は現在三〇パーセントの低支持率にあえぐ史上最も人気のない大統領の一人だ。当然のことながら共和党の後継候補への影響力は弱く、保守本流の本命候補が指名できなかつた。しかも現職のブッシュ政権から選挙に出馬する人物が一人もおらず、選挙戦が異例の早い展開となった。現職の大統領か副大統領が立候補しなかつた選挙は、

一九二八年以来の八〇年ぶりのことだといわれている。ブッシュ大統領はイラク戦争の失敗で、世界における米国のリーダーシップと威信を大きく傷つけた。そもそもイラク開戦における政権の情報が不正確で、大義名分のイラクに大量破壊兵器が存在せず、イラクのアブグレイブ収容所での捕虜虐待という不祥事が世界に明らかになったことで、米国人の自尊心は大いに傷き、ブッシュ大統領個人への信頼も決定的に損ねられた。そのような米国人が求める新しい大統領は、これまでのブッシュ政権が主導した米国からの決別と大きな変革を達成できる人物にな

渡部 恒雄

▶三井物産戦略研究所  
主任研究員

らざるを得ない。したがって、民主党予備選への期待と熱気は大変大きいものだったのだが、それがさらにオバマ、ヒラリーという二人の魅力的な候補の大激戦となったことで、民主党に大きな勢いが生まれた。今回のスーパースターチーフデーでは民主党の投票者数が一千万人に達し、ライバルの共和党を四〇〇万人上回っている。

共和党で指名をほぼ確実にしているマケイン候補だが、彼もブッシュ大統領へのアンチテーゼともいえる候補だ。そこに十一月の本選での彼の勝機がある。二〇〇〇年の共和党予備選挙で指名をブッシュ候補と争ったマケイン候補は、感情的にも政策の上でも、ブッシュ候補とは相容れる存在ではない。二〇〇〇年の予備選挙では、マケイン候補に対して激しいネガティブキャンペーンを繰り広げたブッシュ候補自身が、「彼は長い捕虜生活で頭がおかしくなっている」という発言をして物議をかもし出した。そもそも、マケイン候補が、拷問や虐待が横行するベトナムの捕虜収容所に長くいた理由の一つは、父親が太平洋軍司令官となったため

に、優先的に収容所からの帰国を持ちかけた北ベトナム軍の取引を自ら断ってあえて残ったためである。そのマケインの公正無私な態度がマケインを全米の英雄にした。

その意味で、米国民は、ブッシュとマケインの精神的な距離はかなり遠いと考えている。二〇〇四年の大統領選挙では、マケイン上院議員は、ともにベトナムに従軍し、

親しい友人であるブッシュ大統領の対抗馬の民主党のジョン・ケリー候補の副大統領候補になるのではないか、という観測も流れたほどだ。最終的には、マケイン上院議員は、ブッシュの応援に回る決断をし、その時点で和解をすることになる。しかし和解後も、マケイン上院議員はイラク戦争は支持しているが、ブッシュ政権の戦争遂行姿勢には批判的で、ラムズフェルド国防長官を「米国史上最悪の国防長官」と呼び、国内外から批判をあびてきたイラクのアブグレイブ収容所やキューバのグアantanamo収容所での捕虜虐待も厳しく批判してきた。

このように今回の大統領選挙の底流には、民主党・共和党ともに、

ブッシュ政権のイラク戦争の失敗によって損なわれた、米国の信頼や力を取り戻すための、新しいリーダーシップを求める米国人の期待がある。米国人はA B B (Anvities due Bushブッシュ以外) を求めている。これが今回の大統領選挙を決める最大の要素といっていだらう。

**クリントンがオバマに追い詰められた理由**

希望を与える候補としては十分に有資格者である。しかし上院議員一期目で四六歳のオバマ候補の発する若々しいメッセーに比べると、ホワイトハウスの経験があり六〇歳のクリントン候補のメッセーは、変化というアピールにおいてオバマ候補に劣ることは否めない。

二〇〇八年一月三日のアイオワ州での党員集会から始まった予備選挙レースだが、民主党では、それまで知名度と圧倒的な資金力で、世論調査でも全国的に大きな支持を得て先頭を走っていたクリントン候補を、オバマ上院議員やエドワーズ前副大統領候補らの挑戦者が追いかけるという形でスタートした。しかし、緒戦のアイオワでオバマ候補が一位を獲得し、クリントン陣営はまさかの三位となる衝撃的な敗北となる。

民主党の予備選では、接戦を繰り広げているライバル、クリントン候補に対して、オバマ候補の勢いが日に日に大きくなってきている。それは、米国の新しいリーダーシップを求める声をもっとも多く集めたのが、民主党のオバマ候補であるからに他ならない。「経験」と「能力」を強調するクリントン候補に対して、オバマ候補は「希望」と「変革」を前面に掲げるメッセーに絞込み予備選を戦っている。これが図に当たり、ブッシュ政権からの決別を切望する米国民に大きくアピールすることとなった。

クリントン候補も、史上初の女性大統領の期待があり、変化への

しかし、一月八日のニューハンプシャーの予備選では、クリントン候補が逆転勝利し、オバマの勢いを止めたかに見えた。二月四日のスーパースターチーフデーではオバマ対クリントンは互角の勝負を繰り広げる。オバマ候補は一三州で勝利してクリントン候補の八州を

上回つたが、大票田のカリフォルニア州とニューヨーク州をクリントン候補が抑さへ、獲得議員数ではクリントン候補が八三三とオバマ候補の七四一という結果となった。

しかし、その後の首都決戦といわれた二月十三日のメリーランド、バージニア・ワシントンDCの予備選挙では、オバマ候補が、それまで苦手とされていた女性票、ヒスパニック票、低所得者票、低学歴票をも取り込み、その勢いが止まっていないことを証明し、獲得代議員数でもオバマ候補がクリントン候補を逆転し、追い込んでいく。

民主党の予備選を振り返ってみて決定的だったのは、オバマが勝利した二月二十六日のサウスカロライナ州の予備選である。黒人票の多いサウスカロライナはオバマ候補が優位とはいわれていたが、ここでの選挙戦で、クリントン陣営は致命的な失敗を犯した。陣営はヒラリーの夫のビル・クリントン元大統領を選挙運動に動員し、彼の口から対抗のオバマ候補に対してネガティブな攻撃をさせた。あまりにも、ビルがヒラリーと一体化して発言するので「ビラリー」と

揶揄されるほどだった。

クリントン陣営は選挙のプロの集団である。必要であれば効果的な「仁義なき」ネガティブ・キャンペーンも厭わない。しかし、ビル・クリントンが関わったネガティブキャンペーンは、変化を切望する有権者にはあまりにも古い体質の選挙と映った。ビル・クリントン大統領は決して人気のない政治家ではない。しかし米国の根本的な変化を望む有権者にとって、ブッシュ政権（一九八〇～一九九二）、クリントン政権（一九九三～二〇〇一）、ブッシュ政権（二〇〇一～二〇〇八）の後に、もう一度クリントン政権ができることへの不安と嫌悪があったことは想像に難くない。

二月十三日付の日本貿易振興機構のジェトロデイリー「通商弘報」に、エリス・クラウス、カリフォルニア大学教授（政治学）が、そのような有権者心理を裏付けるコメントをしている。クラウス教授自身は、以前は経験の豊かさからヒラリー候補を支持していたが、サウスカロライナ予備選における彼女の選挙戦術に幻滅して、ヒラリーのワシントンの長い経験は、現在

の米国が求めているものとは違っているのではないかと考えるようになり、オバマ支持となったと証言している。

選挙キャンペーンで最も重要な資金に関しても、クリントン陣営は早い段階で莫大な献金を集めたゆえに、資金枯れに苦しんでいる。そもそも、三月に至るまでこのような激しい選挙が続くとは誰も予想していなかった。かたやオバマ陣営は、草の根から小額の資金が大量に集まってくるだけでなく、クリントン陣営からオバマ陣営に鞍替えした大口献金者も増えてきている。政治資金規正法では、個人が一人の候補者への献金額には上限があるが、別の候補者に献金する上では、他の候補者への過去の献金はまったく問題にならないからだ。

大方の予想を覆し、三月四日のミニチュースデーの結果は、クリントン候補が三勝一敗、しかも大票田のオハイオ、テキサスの両州で勝利し、レースに踏みとどまる大健闘をみせた。大票田のテキサスでは僅差の勝利に終わり、数字の上ではオバマ候補優位の情勢は変わらない。ただし、ここでの逆

### わたなべ・つねお

1963年、福島県生まれ。東北大学歯学部卒。米国ニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチで政治学修士課程修了。96年より、ワシントンDCのCSIS戦略国際問題研究所・日本部客員研究員となり、主任研究員を経て2003年3月より上級研究員として、日本の政党政治、外交政策、日米関係の分析を担当。05年、日本に帰国、4月より現職。米州（南北アメリカ）、日米関係、安全保障政策の分析、研究に携わる。CSISの非常勤研究員も兼ねる。97年11月、『シビルミリタリー関係の向上で空軍支配を防げ』で読売論壇新人賞佳作入選。主著に『同時多発テロの日本への挑戦：ワシントン戦略シンクタンクからの警告』（財界21、02年8月）。『The Rise of China in Asia: Security Implication』（共著）（January 02 Strategic Studies Institute, Army War College）。『今のアメリカがわかる本』（三笠書房08年3月）



転により民主党の予備選は四月二十二日のペンシルバニアの予備選まで延長された。これは十一月の本選の結果を占う上では大変重要な問題だ。今後ともよほどのことがない限り、クリントン候補の逆転

は難しい。しかし三月四日の勝利はクリントン候補の撤退も難しくした。オバマ陣営のペンシルバニアまでの選挙費用は一千万ドルもかかるといわれている。かたや共和党のマケイン候補は、三月四日にライバルのハッカビー候補が予備選撤退とマケインへの支持を表明して、磐石の態勢を固めた。民主党が今後の予備選でもし不必要な党内対立を引き起こせば、せっかくの民主党の勢いが対共和党の本選まで持続しないだけでなく、オバマ候補の打ち出した「変革」というメッセージを古い政治の手法にまみれさせることにもなりかねない。

**オバマとマケイン、どちらが強いのか？**

もしクリントン候補が「奇跡の逆転」をすれば民主党が分裂し、マケイン候補が優位に立つだろう。それではオバマ候補とマケイン候補、本選ではどちらが優位なのだろうか。この点に関しては現時点では予断を許さない。オバマブームの現在、世論調査ではオバマ候補への支持がマケイン候補を上回っている。しかし、このような数

字は、半年以上も先の十一月の選挙においては何の保証にもならない。本選の鍵になるのは、ブッシュ政権の負の遺産である、景気減速とイラク情勢といふことになるだろう。

マケイン候補が共和党で一匹狼的な存在となり、共和党内に敵が多い理由は、自らの信念を持った政策には絶対的な自信を持ち、政治的な妥協をしないからだ。ブッシュのイラクでの戦略に批判的なマケイン候補も、イラク開戦には賛成票を投じ、さらにイランの状況を改善するために、米軍の撤退ではなくむしろ増派を強く訴えてきた。二〇〇七年初頭に、ブッシュ政権も三万人の陸上兵力のイラクへの増派を行ったが、厭戦気分のみ国の有権者にとってこの政策は人気がなく、増派を主張したマケイン候補は政治的には難しいポジションにおかれていた。しかし二〇〇七年を通じ、この増派が、それまで敵対してきたスンニ派の勢力と対アルカイダで共闘したり、街頭でのパトロールの仕方を工夫し、増派兵力を効果的に使用し米軍はイラクの治安を効果的に改善し、

イラク市民や米軍の死傷者数の数も目に見えて低下することになった。マケイン候補は、共和党予備選では、この結果を元に自らの「ぶれない」姿勢をおおいに有権者にアピールした。

しかしイラクの治安は、イラク政府の統治能力や復興支援という抜本的な解決がない限り長続きする性質のものではない。したがって投票日前のイラク情勢は、マケイン候補とイラクからの撤退を主張するオバマ候補にとって大変重要な争点となり得る。そして、現在の米国人の最も大きな関心は、治安の改善してきたイラク情勢よりも、足下の経済状況にある。特にサブプライムローンに端を発した景気減速への懸念は、対外的には経済のグローバル化への批判に容易に向かうことになる。この点で、「ぶれない」マケイン候補の自由貿易擁護と民主党の支持基盤の低所得者や労働組合の支援を受け、保護主義的な政策を訴えてきたオバマ候補の立場は対照的である。その時点での米国の経済状況が、両候補の政策論争と有権者の評価に大きく影響を与え

ることになる。最後に日本への影響を簡潔に記したい。マケイン候補は自身が同盟重視の伝統的現実主義者で、アジアの安全保障にも造詣が深い。マケイン陣営には、アーミテージ元国務副長官やグリーン前大統領補佐官らの知日派もアドバイスをしている。オバマ候補の外交安保政策は未知数であるが、日米同盟とアジアの安全保障を重視するマイケル・シッフアー元上院議員スタッフのような存在がある。

忘れてはいけないのは、日本はクリントン候補を喜ぶすべての陣営にチャンネルを持つている。過去のような米国の選挙に一喜一憂するような態度は捨て、各陣営のアドバイザー達と意見交換をしながら、肝心の日本の東アジアと世界への安全保障政策を自ら構築しアピールすべき時期にある。そのような主体的な姿勢なしには、米国内にどのような政権ができて、ジャパンパッシング（日本無視）が進むだけの結果になることだけは間違いない。米国は変化を渴望している。現状維持の停滞国に用はないはずだ。